町民参加の町史づくり

竹富町史だより

第42号
2018年9月24日

竹富町教育委員会
沖縄県石垣市新栄町６－18
TEL （０９８０）８７－６２５７

目　次

第42号表紙　小浜島結願祭　北部落の「初番狂言」……1

島じまの踊り・狂言　No.3
　竹富町制施行70周年記念公演
　沖縄県竹富町　島々の民俗芸能　―世乞い―……2
　ピラ狂言（鳩間島）……3
　矼ゆば節（西表島古見）……4
　シーシン棒（波照間島）……6
　新城島節祭の巻踊り……7

書評特集『竹富町史　第七巻　波照間島』刊行！
　得能壽美「『すむづれ』とムシャーマの島」……12
　平良勝保「歴史や自然　島学の結晶」……15
　照屋理「スムヅレの島を網羅」……15

第38回竹富町史編集委員会―議事録―……17

嘉手志川―2018年度沖縄県地域史協議会総会及び研修会から―……21

竹富町史の刊行物一覧……24

編集後記……25

第42号表紙

小浜島の結願祭
北部落の「初番狂言」

表紙は、小浜島の結願祭（国指定重要無形民俗文化財）における奉納芸能のうち、北部落の「初番狂言」の一場面である（2016年）。小浜島の結願祭は旧暦８、９月の己亥の日から４日間行なわれるが、２日目の正日には嘉保根御嶽（カフニワン）の神庭で、南北の二集落がそれぞれに伝承する芸能を奉納する。

太鼓や獅子舞、棒術などの庭の芸能を終えると、間口二間、奥行き二間半の舞台が嘉保根御嶽の拝所に向かって特設され、舞台芸能が始まる。

「初番狂言」は、総代（スータイ）が登場して名乗りをあげ、神前で「大世（うーゆー）、広世（ぴるゆー）や給（たぼ）らりてーてぃ、思（うむ）い出（ん）でぃくーゆ」（大世、広世の豊穣を給わりたいと思ってきました）と口上を述べる。その後、村（ムラ）ヌ親（ウヤ）、アヤク（相棒役）、田補佐（ターバサ）（役人）を呼び出し、稲粟やサツマイモの農作物の豊作と来夏世の祈願が、劇中で実際に行なわれる。

祈願の後、総代は「願（にんが）いわーれる大世（うーゆー）・広世（ぴるゆー）や我給（ばーたぼ）らりしてぃうよはなーな」（祈願しました大世・広世の豊穣を私が戴いてから差し上げましょう）と、豊穣を象徴する神酒を戴き、続いて村ヌ親、アヤク、田補佐も神酒を戴く。

そこへ「天（てぃん）から守神（まむるんがん）」（天からの守護神）が現われ、総代に五穀物種子を授ける。そして「夏（なちぃみじぃ）水に浸（ち）きてぃ　冬水（ふゆみじぃ）に下（う）ろーし」て播種することなどを伝授して去っていく。

その後、眷属の一行が「オータカ」「口説（クンドゥキ）」「与那原節」などのリーヌブンドゥル（定番の踊り）を次々に奉納する。一行が奉納舞踊を終えると、総代が祝言を唱え、《ヤーラヨー節》の演唱に合わせて、舞台を一巡して退場する。

参考資料

・黒島精耕「『長者の大主』の発生と性格」『小浜島の歴史と文化』（私家本、2000年）
・竹富町教育委員会編『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財　小浜島の芸能　―民俗文化財地域伝承活動（資料作成・周知）報告書―』（竹富町教育委員会、2006年）
・『竹富町史　第三巻　小浜島』（竹富町、2011年）
・大城公男『八重山・祭りの源流　―シチとプール、キツガン―』（榕樹書林、2018年）

竹富町制施行70周年記念公演

沖縄県竹富町　島々の民俗芸能

―世乞い―

今年2018年は竹富町制施行70周年にあたります。それを記念して竹富町の民俗芸能公演を「世乞い（ユークイ）」と銘打ち、2018年９月24日、東京・国立劇場（大劇場）にて開催します。

ところで、「世乞い」とは、「世」（豊穣）を乞い求めるという意味です。竹富町の島々の祭祀には、どれも豊穣を祈願することが根本にあり、そこから踊り・狂言といった芸能が派生する様子がうかがえます。時間と空間を定められた祭祀は、毎年、年中行事として繰り返され、そこで演じられる芸能は伝統という幹を太くしながら、島々の暮らしのなかで文化として定着してきました。いうならば、竹富町の民俗芸能の数々は、「世乞い」から派生した枝葉や花々にたとえることも可能ではないでしょうか。

本公演のプログラムは次のとおりです。

1　古謡「種子取祭の世乞い唄」
（竹富民俗芸能保存会）
2　舞踊「デンサ節」
（上原民俗芸能保存会）
3　舞踊「矼ゆば節」
（古見民俗芸能保存会）
4　狂言「ピラ狂言」「鳩間節」
（鳩間民俗芸能保存会）
5　棒芸「シーシン棒」
（波照間民俗芸能保存会）
6　舞踊「干立口説」
（干立民俗芸能保存会）
7　「ダートゥダー」
（小浜民俗芸能保存会）
8　歌謡「鳩間節・小浜節」
（鳩間民俗芸能保存会・
小浜民俗芸能保存会）
9　舞踊「黒島口説」
（黒島民俗芸能保存会）
10　「西表島の節祭」
（西表民俗芸能保存会）
11　「節祭の巻踊り」
（新城民俗芸能保存会）
12　エンディング（出演者全員）

ここでは本公演の演目から、１「ピラ狂言」（鳩間島）、２舞踊「矼ゆば節」（西表島古見）、３棒芸「シーシン棒」（波照間島）、４「節祭りの巻踊り」（新城島）をピックアップし、関連資料を挙げながら紹介します。

1　ピラ狂言（鳩間島）

鳩間島の結願祭は、一年間の願解きを主題とし、友利御嶽の神庭の舞台で芸能の数々が奉納されます。奉納芸能は、冒頭にミルクの歓（あま）い（弥勒行列）があり、長者が登場して祝言を述べる「座開き」が続き、舞踊「かぎやで風」が踊られた後、「ピラ狂言」が演じられます。また、「ピラ狂言」に続く舞踊「鳩間中森」までの一連の流れは定番であり、儀礼的ともいえます。その後は、踊り・狂言の芸能づくしへと展開し、舞踊「しちょう節」でフィナーレを迎えるというかたちが、鳩間島の結願祭の芸態となっています。

「ピラ狂言」は男一人で演じる４分ほどの短い狂言で、右手に大きなピラ（篦）を持って畑仕事を演じます。仕度（コスチューム）は、芭蕉布の着物を着て裾をたくしあげ、藁（わら）綱でたすき掛けをした出で立ちです。儀礼的な狂言でありながら、野性味の立ちのぼる演目です。

狂言手事（三線器楽曲）で下手から登場し、舞台中央前方に立って一礼し、「此（く）りや此（く）ぬ村（むら）（これ〈私〉はこの村の）物作巧者（むじくいくーさ）・浜崎（はまさち）どぅやゆる（農作巧者である浜崎という者である）」と名乗ります。

一般に物作巧者は、農業の経験・知識に長けた人のことを称します。古文献『慶来慶田城由来記』に、「往古之毛作り工者之人相定置候由伝有之事」（昔、農耕に詳しい人が考え定めおいた事）とあるように、天体の運行を目安にして「種子取」をするのが良いといった項目に「物作巧者」が登場します。

台詞からは「さてぃ私達（わったー）　早（へー）さんで思（うむ）れー（さて、畑には我々が早いと思ったら）　村頭（むらがしら）ぬ達（ちゃー）早（へー）くでんなー（村頭の皆さんがお早いではないか）」とあるように、「浜崎」の堂々たる振る舞いを読み取ることができます。また、狂言の後半で歌われる歌《伊計離節》が、浜崎の若かりし頃を回想した内容になっていることなどから考えると、ある程度経験を積んだ熟練者といった「浜崎」像が浮き上がってきます。はたしてこの「浜崎」と名乗る男は歴史的に実在するのか、はたまた架空の人物なのかよく分かりませんが、次のような話が鳩間島に伝わっています。

昔、首里から浜崎と名乗る農夫が鳩間島にやって来ました。島での農業といえば畑作しかありませんが、浜崎の農作業は順調で、農作物は豊作でした。これにはきっと神のお力添えがあったからだといって、浜崎はその喜びを友利御嶽の境内でうたいあげたといいます。これが「ピラ狂言」であるとのことです。

また、儀礼的な狂言のなかにもユーモラスな表現が見受けられます。「潟原（かたばる）ぬ蟹（がに）ぬ（干潟の蟹が）穴（あな）　かち上（あ）ぎてーんねーし（干潟の蟹が穴を掘って盛土してあるように）　堂々（どぅーどぅー）見事（みぐとぅ）やっさー（堂々として見事であるよ）」と、イモ掘り前の畑の状態（ムイアッコン）を蟹が

ピラ狂言〔提供：本田安次〕

盛土した様子にたとえた観察眼や、「三歳なる馬小ぬ（3歳になる馬の）ハチマラハンチャンねーし（勃起した陰茎に似て）　堂々　見事やっさー（堂々として見事であるよ）」と、収穫したイモ（サツマイモ）をハチマラハンチャンにたとえたり、比喩の面白さが際立っています。

後半は、「んだ　先じ　一ちぇー（どれ、先ずは一つ）掘ってぃんだ（掘ってみよう）」と、いよいよ腰を落とし、ピラでイモを掘る仕草を演じます。そして掘ったイモを持って収穫の喜びを高らかに表現しています。

持ち登てぃ
（そのイモを持ち登って）
村中に見してぃ
（村中の皆さんに見せて）
珍らさんしみてぃ
（珍しいと思わせて）
不思議んしみてぃ
（不思議に思わせて）
作らさにはしまん
（作らせねばならない）
んだ　先じ　一ちぇー
（どれ、先ずは一つ）
芋草剃ーてぃんだ
（芋の雑草を箆でしゃくり取ってみよう）

そして最後に、村人たちにもイモを作らせようと、にぎやかな《伊計離島》に合わせて、ピラで芋草を取る所作を演じながら退場します。そこにはイモの実りを喜ぶ農民の生き生きとした姿が写されています。

引羽には、次の《伊計離節》（早弾き）が用いられています。

若さひと時ぬ　通い路ぬ空や
（若いとき恋人のもとへ通う道の空は）
闇ぬさく坂ん　車と一原
（闇夜の谷や坂も車の走る平地のようだ）
若さ時にや
若かったときには）
腰ん病まんたしが
（腰も痛まなかったが）
くぬ年なてぃ
（この年になって痛むのだ）
ヒーヤヨーンナー
（ヒーヤヨーンナー〈囃子詞〉）
今日や何がかん面白さる
（今日はどうしてこんなに面白いのか）
焼酎ん出じゃしば
（焼酎も出して）
飲でぃ遊ば
（飲んで遊ぼう）
ヒーヤヨーンナー
（ヒーヤヨーンナー〈囃子詞〉）

前段の若かりし日の颯爽とした姿を受けて、後段は腰痛に悩まされる年齢を嘆く現実が歌われており、その落差の大きさが笑いのポイントにもなっています。しかし、なぜか浮き浮きし、焼酎でも飲んで遊ぼうという結末には、ポジティブなエネルギーが感じられます。

参考資料

・大城學『沖縄の祭祀と民俗芸能の研究』（砂子屋書房、2003年）
・『竹富町史　第六巻　鳩間島』（竹富町、2015年）

2　舞踊「矼ゆば節」（西表島古見）
—その歴史的背景—

古見村は八重山有数の古邑で、古くは八重山の政治・経済、交通、文化などの中心地として栄えました。村の背後には、北方に古見岳、西方に御座岳をひかえています。

また、村の南方には前良川、北方には後良川

が流れており、村はその間にある三角形の小高い岡に立地しています。二つの河川には橋がないので、他集落との通行に支障をきたしたので、1690年当時の古見首里大屋子職・波照間親雲上用恒が前良川に木橋を架けました。これが「三離橋」で、古見村の橋の始まりです。

ところが、木橋は老若男女が水や薪木を運ぶのに安心して渡れるものではなかったようです。1715年、古見首里大屋子・宮良長林が石橋改築工事の認可を得、黒島首里大屋子を監督に仰ぎ、同年に完成を見ました。三離橋の経験をもとに、八重山中から夫役を募り、ひき続き後良川にも大枝橋を架けることができました。俗に三離橋を「南ヌ橋」、大枝橋を「北ヌ橋」と称します。

二つの橋にはそれぞれ1715年に記念碑が建立されています。その事績を記した碑文の内容については、次の資料があります。御参照下さい。

・八重山歴史編集委員会編「古見の二大橋」『八重山歴史』(八重山歴史編集委員会、1954年) 213－216頁。
・喜舎場永珣「(7)三離橋の碑文」「(8)大枝橋の碑文」『八重山民俗誌』〈下巻〉(沖縄タイムス社、1977年)
・沖縄県教育委員会文化課編「(78) 三離橋碑」「(79) 大枝橋碑」『金石文―歴史資料調査報告書Ⅴ―』(緑林堂出版、1985年) 81－84頁。
・「三離橋碑」「大枝橋碑」『竹富町史だより』〈第19号〉(竹富町、2001年) 10－11頁。

また、強固な石橋が完成した喜びをうたったのが《矼ゆば節》だと伝えられています。親しみやすい旋律から、八重山各地でよくうたわれています。また舞踊曲として《鶴亀節》《くいぬぱな節》《大原越地節》などのチラシ(引羽)や、波照間島のムシャーマで踊られる南部落の舞踊「スン踊り」など、各地の民俗芸能にも取り入れられています。

《矼ゆば節》を紹介した資料に、喜舎場永珣「橋世バ節」『八重山民謡誌』(沖縄タイムス社、1967年) 300－303頁、編著・當山善堂「矼ゆば節」『精選　八重山古典民謡集』(ティガネシア、2009年) 276－286頁などがあり、これらには歌詞の異同もみられます。ここでは古見村で歌い継がれている歌詞を紹介しましょう。

1　古見ぬ浦ぬ　矼ゆば　ヨー
　(古見の浦に矼の架かった由来を)
　シタリヌヨーンゾ〈囃子詞、以下省略〉
　(シタリヌヨーンゾ)
　ミユスゥクぬ　矼ゆば　ヨー
　(ミユシクに矼の出来た訳を話そう)
　ハイヨーシュラヨー〈囃子詞、以下省略〉
　(ハイヨーシュラヨー)
2　港まどぅ　やたそぬ　ヨー
　(そこは小さな港であったそうな)
　ヤラダマどぅ　やだそぬ　ヨ
　(そこは泥土でぬかるんでいたそうな)
3　古見ぬ主に　しやりてぃ　ヨー
　(古見村の首里大屋子様のお陰で)
　主ぬ前に　うぬぎてぃ　ヨー
　(お役人様のご尽力によって)
4　大石垣　渡りょーり　ヨー
　(石垣島に渡り)

舞踊「矼ゆば節」(古見結願祭、2017年)

親村に　移りょーり　ヨー

（親村に行って）

5　沖縄主に　しやりてぃ　ヨー

（在番役人に申し上げ）

頭主に　申ぬぎてぃ　ヨー

（頭主に申し上げて）

6　古見ぬ浦に　うふりょーり　ヨー

（古見の浦に　渡って）

ミユスゥクに　渡りりょーり　ヨー

（ミユシクに渡って）

7　村々ぬ　夫ば乞い　ヨー

（村々の人夫を請い集め）

四十原ぬ　夫ば寄し　ヨー

（四十の村から人手を寄せ集め）

8　女しや　石曳き　ヨー

（女たちは石を運び）

男しや　積んつきぃ　ヨー

（男たちは石を積み上げ）

9　曳き美らさ　女し　ヨー

（石を曳く事の美しさは　女たち）

並み美らさ　男し　ヨー

（石を並べる事の美しさは　男たち）

10　シンザイぬ　元から　ヨー

（シンザイヌ　元から）

ブシザキぬ　尻までぃ　ヨー

（ブシザキヌ　終わりまで）

11　誰ぬ主ぬ　御蔭に　ヨー

（誰の主の　おかげで）

何りぬ主ぬ　御恩に　ヨー

（いずれの主の　御恩で）

12　古見ぬ主ぬ　御蔭に　ヨー

（古見の主の　おかげで）

主ぬ前ぬ　御恩に　ヨー

（主の前の　御恩で）

13　思た事　叶しょーり　ヨー

（思ったことが　叶いました）

願た事　じなしょり　ヨー

（願ったことが　叶いました）

（『第24回　竹富町古謡発表会』〈2017年〉パンフレット参照）

上の歌詞からは、古見ヌ主（古見の御役人）が石垣島に渡り、頭主に窮状を訴えたのが受け入れられ、八重山中の人々を募って、架橋に取り組んだことがうかがえます。その様子は第８節で「女しや　石曳き　ヨー」（女たちは石を曳き）、「男しや　積んつきぃ　ヨー」（男たちは石を積み上げ）とあり、その光景を「曳き美らさ」・「並み美らさ」と讃えています（第９節）。

古見村では第６節までに振り付けた舞踊が伝承されています。スディナ・カカンのコスチュームをまとった女性が四つ竹を持ち、二人一組で踊ります。ゆったりと踊られるなかにも、架橋の喜びが表現されており、打ち鳴らす四つ竹の音も軽やかに聞こえます。

3　棒芸「シーシン棒」（波照間島）

波照間島の旧盆は、旧暦７月13日が祖先を迎える供日（シキルピン）、14日は中（ナカ）ヌ日（ピン）、15日が祖先を送る送日（ウグルピン）という一般的な盆行事の日程に加えて、中ヌ日にムシャーマが行われます。ムシャーマは、「ソーリン」（精霊祭）と対をなして「ソーリン・ムシャーマ」と呼びならわされ、一連の盆行事に位置付けられますが、島の五つの集落を西・東・前の３組に分け、多彩な芸能に興じるところに特色を見いだすことができます。

ムシャーマは午前中、各集落から公民館まで道（ミチィ）サネーといって弥勒神（ミルク）を先頭とした仮装行列があり、公民館中庭で棒と太鼓が演じられた後、ニンブチャー（念仏踊り）が行なわれます。午後からは舞台で踊り・狂言が演じられます。舞台芸能のフィナーレを飾るのは東組の舞踊「コームッサー」が定番で、これが終わると中庭で大勢の観衆が取り囲むなか、西組の「シーシン棒」が演じられ、３組６

頭の獅子が勢いよく舞い踊ります。

シーシン棒の衣裳は、頭に白鉢巻を締め、白シャツに黒帯、赤襷を掛け、白ズボンに白紋付入の赤脚絆を巻いた出で立ちです。シーシン棒は「棒かざり」、「棒取り」、「棒突き」で構成されています。五尺棒を持って、笛、銅鑼の伴奏に合わせて演じられますが、なかには獅子をおびき出す所作も盛り込まれています。

演技的にも、歴史的にも、石垣島字新川のパイヌスマカンター棒との関係性が指摘され、特にそれぞれにうたわれる歌謡は歌詞や旋律の類似性がみられます。

西組による「獅子の棒」や３組による獅子舞が行なわれている間、東組の棒打ちのうち、長刀棒２組４名が棒の下方を掛け合わせ、軽く打って拍子をとりますが、これを「ウケ・ムケ」と称しています。これは万一、獅子が暴れ出したとき、これを迎え撃つためであると伝えられています。

棒芸「シーシン棒」(波照間島ムシャーマ、1993)

獅子舞の後方に「ウケ・ムケ」が見える

シーシン棒と獅子舞の後、各組は行列をなし、夕陽を浴びつつ各集落に帰っていきます。

参考資料

・『沖縄県選択無形民俗文化財記録作成　波照間島のムシャーマ　―南国の豊年祈願と祖先供養の祭典―』(波照間民俗芸能保存会、1982年)

・『新川村南風ぬ島カンター棒獅子舞定本』(南風ぬ島カンター棒保存会、2008年)

・『竹富町史　第七巻　波照間島』(竹富町、2018年)

4　新城島節祭の巻踊り

新城島の節祭ではあらゆる場面で巻踊りが踊られます。踊り手はパテチィキィ（旗突き）を中心に円を描き、全員が半身を構えながら中心を向き、隣り同志が手を組んで、歌のリズムに合わせて横にステップします。

巻踊りは、節祭の日を待望する《今日が日》から始まるのが一つの様式です。新城下地島の《今日が日》の歌詞には、「我ぎや船ぬ嘉例吉どぅ響よます」（我らの航海安全を讃えます）と船に対する誇りを高らかにうたっています。

その他、巻踊りに伴って、島の伝説やかつての暮らしが読み込まれた、多彩な歌謡が次々に歌い継がれていくのは圧巻です。その歌唱はアンツクヌフチィ（音頭取り）によって先導されます。踊り手一同は、アンツクヌフチィが歌う一節を、同じ歌詞と旋律を反復して歌います。踊りは適宜、「サーサ　ハイ　ハイ、サーサ　ユイサ　ユイサ、サ　サ　サ　サ」と囃子詞を入れながらリズミカルに踊ります。

巻踊りの歌謡はテンポが一定であるのは特色の一つといえますが、それは足を前後に踏みかえながら踊る巻踊りのステップを基準としているからです（山里純一「八重山新城島の節祭り歌謡」参照）。

巻踊りにおける歌曲の選択はアンツクヌフチィに一任され、原則として１曲の終わりに「イヨー　ソーエーナウレ」の囃子詞を入れて、次の曲に繋いでいきます。つまり、アンツクヌフチィの宰領でもって、次々と曲を変え、メドレーで繋いでいくのです。そのため曲順、曲数はその場によって異なります。伴奏楽器といっても銅鑼・太鼓のみで、どの歌曲も同じテンポなのですが、１曲ごとの曲想の違いが巻踊りを劇的に展開させます。

参考に1974年の節祭の記録をみてみましょう。例のごとく巻踊りは《今日が日》から始まります。その後、《今日の日》、《東から》、《大野辺端》、《真謝女童》、《うふにゃむい》、《よるかよーれ》、《ぱいけだー》、《二月》、《金志川の金盛》、《古見なーべちぃ》といった歌謡が歌われています（『日本民謡大観（沖縄奄美）八重山諸島篇』日本放送出版協会、1989年参照）。

以上の歌曲のなかから、ジュゴン漁の様子を歌った《まじゃみやらび》と、西表島仲間川の河口に広がって生育するヒルギの一生を歌った《ヨルカヨーレ》（上地島）を紹介します。

《まーじゃみやらび》〔上地島〕

1　真謝乙女ぬよ
（真謝村〈白保〉の乙女達がよ）
メーショーレノ　カナシ
（メーショーレノ　カナシ〈囃子詞、以下略〉）
2　四カ乙女ぬよ
（四ヶ村〈石垣〉の乙女達がよ）
3　磯山よ　まりゃらきよ
（磯山を廻り歩いて）
4　あだに山ば　まりゃらきよ
（あだんの林を廻り歩いて）
5　ゆなかじぃばゆ　剥ぎぃどーしよ
（オーハマボーの表皮をはぎとって）
6　あだなしぃばゆ　切りぃどーしよ
（あだんの気根を切り取って）
7　三日干しぃゆ　晒しょーりよ
（三日間も干し晒して）
8　四日干しぃゆ　晒しょーりよ
（四日間も干し晒して）
9　裂ぎぃな裂ぎぃゆ　見りばどぅよ
（裂きに裂いて〈細かく裂いて〉見ると）
10　綯ぎぃな綯ぎぃゆ　見りばどぅ
（綯いに綯いて〈縄をなって〉みると）
11　大目網ば　くぬみょーりよ
（大きい目の網を編んで）
12　八つ目網みあんば　くぬみょーりよ
（八つ目の網を編んで）
13　前泊に　降るしょーりよ
（前泊の浜に降ろして）
14　漁港に　降るしょーりよ
（漁港に降ろして）
15　漁船にゆ　乗ゆしょーりよ
（漁する船に乗せて）
16　なら船にゆ　乗ゆしょーりよ
（自分の船に乗せて）
17　漕ぎな漕ぎゆ　みりばどぅよ
（漕ぎに漕いでみたら）
18　押しな押しゆ　みりばどぅよ
（押しに〈対語〉押してみたら）
19　真謝口ゆ　まーりゃらきよ
（真謝口を廻ってきて）
20　四カ口ゆ　まーりゃらきよ
（四カ口〈さくら口〉を廻ってきて）
21　立てぃな立てぃよ　みりばどぅよ
（網を張り立ててみたら）
22　潮ゆ干さし　みりばどぅよ
（潮を干かしみたら）
23　ざんぬ夫婦ゆ　捕るんてぃよ

（ざんの夫婦を捕獲しようと）
24　亀ぬ夫婦ゆ　捕るるんてぃよ
（海亀の夫婦を捕まえようと）
25　漁船によ　乗ゆしょーりよ
（漁船に乗せて）
26　なら船よ　乗ゆしょーりよ
（自分の船に乗せてよ）
27　漕ぎぃな漕ぎぃよ　みりばどぅ
（漕ぎに漕いでみたら）
28　押しな押しよ　みりばどぅよ
（押しに押してみたら）
29　漁　港に　降るしょりよ
（　前泊に　降るよぅりよ
（前泊に降ろして）
31　虱　取るぬ　なちぃきしよ
（しらみ取りを口実にして）
32　子虱取るぬ　なちぃきしよ
（子じらみ取りを口実にして）
3　なら物ゆ　見るんてよ
（自分のものに似たものを見ようとして）

冒頭では、石垣島の真謝（白保村）や四カ字の乙女たちが、アダンなどから取った繊維で大きく丈夫な網を作っている様子が歌われています。男はこの網を持ってジュゴン漁に出ます。ジュゴンを捕って島に持ち帰ったら、島の女たちはあまりにも自分の性器に似ているので、シラミ取るのを口実にしてのぞこうとしたという内容です。ジュゴン漁を舞台に石垣島の乙女との交流も描かれているのは、たいへん興味深いことです。

なお、新城島のジュゴン漁とその歴史的な背景についての詳細は、『竹富町史　第五巻　新城島』第４章第４節第２項「ザン」を参照ください。

下地島でジュゴン漁をうたった歌謡は《ザントゥル　ジラパ》と呼んで伝承されています。その内容は上地島と大同小異です。

つまり、この歌謡について、上地島では歌いだしの歌詞から《まーじゃみやらび》と呼び、下地島では歌謡の内容から《ザントゥル　ジラパ》と呼んで伝承しているのです。

新城島の巻踊り〔提供：大浜博吉〕

《ヨルカヨーレ》

1　ヨルカヨーレ
（ヨルカヨーレ〈囃子詞、以下略〉）
今日ぬ日ば　元ばし
（今日の吉日を元にして）
ヨールカヨ
（ヨールカヨ〈囃子詞、以下略〉）
2　黄金日ば　元ばし
（黄金の吉日を元にして）
3　うん川ぬ　ぴにき
（大きな川のひるぎは）
4　ぴにきぬ　生いや
（ひるぎの生い立ちは）
5　んなとぅばた　生いさ
（川の流域に繁茂している）
6　やらざばた　さしゅた
（泥沼の中林立している）
7　うるずぃんぬ　なるた
（うるずんになったので）
8　若夏ぬ　いるた
（若夏の季節になったので）
9　南風ぬ　うしゅた
（南風が吹き始めたので）

10　盆南風ぬ　さしゅた

（盆南風が吹き始めたので）

11　花よ花　ちくさ

（花という花が咲きほころび）

12　花よ花　落てぃさ

（やがて花が落花して）

13　実よ実　なりぃさ

（実がたわわになった）

14　実よ実　落てぃさ

（実が熟して落ちはじめ）

15　水ぬ上　落てぃさ

（水の上に落ちて）

16　泥ぬ上うい　落てぃさ

（泥土の上に落ちて）

17　引潮ぬ　いでぃた

（引き潮がでたので）

18　引潮に　さんがれ

（引き潮に流されて）

19　干瀬や後　さんがれ

（リーフの外まで流されて）

20　ゆにや後　さんがれ

（ユニの裏まで流されて）

21　波ぬばた　揉まれ

（荒波に揉まれ）

22　波ぬばた　揉まれ

（波の中で揉みくちゃにされ）

23　満潮ぬ　いるた

（満潮に入ったので）

24　満潮に　さんがれ

（満潮に乗じて）

25　同ぬんなと　入るさ

（同じ川に入ってきて）

26　同ぬやらだ　入るさ

（同じ泥沼に入ってきて）

27　蟹ぬ家ば　家ばし

（蟹の穴目を住かにして）

28　泥ぬ中ば　家ばし

（泥土の中を住処にして）

29　うん川ぬ　ぴにき

（大きな川のひるぎさんよ）

《ヨルカヨーレ》はウルズィン（陽春）の季節に、南風が吹き始めると、ヒルギ(マングローブ）の花が咲き、やがて実を結び、実が水の上に落ちると、引き潮で沖へ流されて漂い、再び満潮に乗って同じ川に戻って、蟹の穴目に根を下ろし、そこに根を張って生育するヒルギの一生が物語られています。

歌詞からうかがえるように、ヒルギは実についた幼根が鋭くとがっており、これが軟らかい泥に突き刺さって根を張り、芽を出して生長します。このように島人は自然の摂理をよく観察し、繁茂するヒルギを豊かに表現しています。

曲名は、歌いだしの囃子詞である「ヨルカヨーレ」によるもので、一名《大川原ヌピニン木》とも称されます。下地島では《ピンニキ　ジラパ》の名称で伝えられており、内容は大同小異です。野底宗吉氏によれば、囃子詞「ヨルカヨーレ」は方言で「ぶらり、ぶらり」という意味があるようです（『新城下地島節祭ジラパ集』新城島下地島を守る会、1988年参照)。ヒルギが「ナンヌバタ　ムマリ（荒波に揉まれ）／サイナマニ　ムマリ（小波に揉まれ)」とあるように、大海に浮遊する様子と重なってユニークな印象をもたらしています。

《まーじゃみやらび》や《ヨルカヨーレ》のみならず、《くんなべちぃ》などの歌謡からもうかがえるように、島人は新城島の海浜や仲間川河口にとどまらず、広範囲の自然を把握した世界観を視野に持っていることが理解できます。

ところで、節祭の巻踊りは、旗突きを中心に円を巻き、隣り同士が互いに手を組み、歌い踊られます。そこには「世」（豊穣）を巻き取る意味があると同時に、島人の結束力をも表しているように思われます。島にゆかりのある人々は島の芸能を演じ、節祭の巻踊りの輪に加わることで、島人であることのアイデンティティー

を実感することでしょう。

新城島の芸能は、民俗文化を土壌にして発生し、歴史的に展開して継承されてきました。このことは、民俗芸能が単なる娯楽としてではなく、祭祀を維持し、コミュニティの結束を強化するという、社会的機能も果たしていることを物語っています。

参考資料

・新垣恒和「ぴんにきの歌―八重山新城島の民謡―」(『沖縄教育』〈第309号〉沖縄県教育会、1942年)

・野底宗吉編著『新城下地島の節祭ジラパ集』(新城下地島を守る会、1988年)

・西大舛高壱・登野原武『新城上地島の古謡と祭祀』(私家本、2000年)

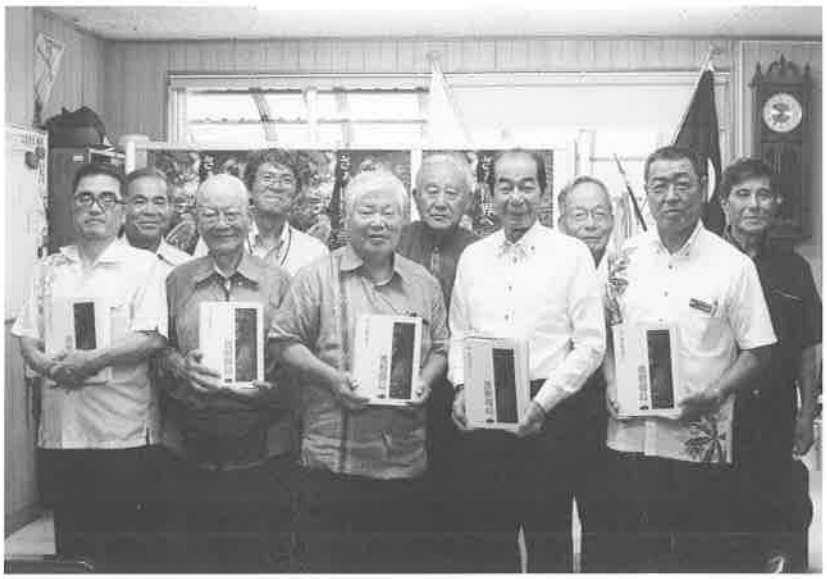
・『竹富町史　第五巻　新城島』(竹富町、2013年)

・石垣　繁「新城島のシュチュの神歌」『八重山諸島の稲作儀礼と民俗』(南山舎、2017年)

(文責・飯田泰彦)

新城島の巻踊り(第７回ぱいぬ島まつり、2011年)

『竹富町史　第七巻　波照間島』刊行！



2018年（平成30）３月、『竹富町史　第七巻　波照間島』が発刊されました。同書編集の取り組みは、2003年（同15）に波照間島出身者で専門部会を発足させて始まりました。内容は、波照間島のことを総覧すべく、歴史や伝承、自然、伝統文化、教育、産業などが、全13章900頁余にまとめられています。ぜひとも各地域の島づくりや学校教育にも活用していただきたいものです。

地元各紙に、得能壽美氏（法政大学大学院講師）、平良勝保氏（宮古島史編さん委員）、照屋理氏（名桜大学上准教授）による書評が寄せられています。御参照下さい。

「すむづれ」とムシャーマの島

得能壽美

「すむづれ」（肝揃え）は島人の精神的風土を象徴する言葉で、「心をそろえ」「思いやり」のこと。島最大の行事ムシャーマが「すむづれ」で行なわれるならば、本書もそれでできている。内容はおいおい紹介するが、とりあえず「すむづれ」の成果である本書は900頁を超えた。

「島で生まれ育ったすべての島人は、ムシャーマと共に成長し、それぞれの年代にふさわしい演目を演じ、《弥勒節》を最後に年老いて引退するといわれる。島人なら誰でも、この行事に対して特別な思いがあり、「ムシャーマがあるから長生きする」というほどである」という。本書がその応援をできるかも。

本書の編集は、『竹富町史　第七巻　波照間島』専門部会、部会長玉城功一、委員大泊孝、島村賢正、通事孝作、仲底善章、西前津松市、東迎一博、本田昭正の各氏が担当し、多くの執筆者によって完成した。

第１章「島の概況」第２節「地名」で、いわゆるハテルマの語源論争が整理されている。1954年から1955年にかけて行なわれた、人類学者金関丈夫と宮良當壯との論争である。のちに言語学者服部四郎、考古学者国分直一らが加わって、テーマも拡大、拡散していき、ハテルマを発端に八重山はもとより琉球文化全体におよぶ学問的に重要な論争となった。

字名と地番では、沖縄で全体的に畑の名はハル名というが、「波照間島では畑をピテとかピナと呼び、地名を頭に付けて〇〇ピナと呼ぶなど日常生活で気軽に使用された」といい、土地改良以前の小字地図とその一覧を掲載する。

第３節「集落」での「波照間島古琉球から現代までの村分布図」「古琉球から近現代に至る集落の歴史的変遷」は、村（集落）の変遷をわ

かりやすく示している。近世以降の村（集落）の歴史的な展開は、税制よりも行政の要求によるところが大きいと思われる。

第４節の「人口動態」は、数でみる島の歴史であり、深読みする入り口となる。

序章・第１章をはじめとして本書の各所で参照されるのは、仲本信幸氏の『回顧録』（私家本　1977）と、同氏の遺稿集（本田昭正『波照間島の歴史・伝承考――仲本信幸遺稿集――』私家本　2004）である。

第２章「自然」第２節「水」では、「現在、波照間島では海水淡水化施設の恩恵を受けているが、雨水、井戸水、湧水などは人間活動や動植物を育んできた〈命の水〉であり、島の自然環境を理解し、地下水涵養源となっている石灰岩台地と地下水の水質の保全を図ることは重要である」が、「大規模な土地改良事業が導入され……アナブ（注・沼地）が消えた」事実を忘れてはいけない。

第３節「海岸と海」の「波照間島沿岸域の呼称」の地図と表は詳細をきわめ、海岸の利用権が認められたインヌパカも表示する。そして集落から海への降り口をいうウダチと道路の地図と表があり、磯や外洋の生き物がまとめられ、人と海との濃密な関係を示す。その海岸に生息するウニやナマコの多くの種類に方言での呼称があり、著者の島村修氏はその味まで覚えていらっしゃる！島の自然でいえば、植物の外来種は30を数えている。

第６節「天文」で、「夕方に見える明るい星（宵の明星）を「スカマボシ」と呼ぶ。夏の暑い時期には、島人は朝ご飯前のアサボーと、夕方の涼しい時によく仕事をした。特に夕方、この星が見えるまで仕事をしたので、この星を仕事を意味する「スカマ」の名で呼んだ…金星は「ヘーダマブシ」（食いしんぼうの星）とも呼ばれている」と、自然とともに生きる島民の暮らしをうかがわせる。

第３章「歴史と伝承」では波照間島の歴史的展開が示される。とりわけ第10節「燐鉱の興亡」、第14節「パイパティローマ伝説とその広がり」は注目できる。

第10節「燐鉱の興亡」は、戦前の波照間島で採掘された燐鉱は、かつて海鳥の糞が堆積して燐となり、アジア・太平洋戦争前の一時期に島の経済を潤し、その終戦によって終焉を迎えた。次いで第11節「戦争と波照間島」には、竹富町史島じま編全巻に掲載される「全戦没者名簿」が15頁近くにわたって掲載される。その合計は593人におよび、さらにそのうちの93パーセントがマラリア罹患死亡者である。

歴史は近代・現代と語り継がれ、第３章「歴史と伝承」の最後の第14節を「パイパティローマ伝説とその広がり」とする。まず史料に記録された南波照間事件と島での伝承からその実態を探り、明治政府が行なった南波照間島探索と、田代安定の考察を紹介する。

第４章「教育」第１節「学校教育」については、『波照間小学校沿革誌』がある。それ以前、島には権力がつくった村学校はなく、かえって島民による島に根ざした教育が可能となり、島民性の基盤が培われた、という見方はおもしろい。

波照間島の学校は、明治27年開校、戦前の名称変更を経て、昭和24年波照間小学校となり、波照間中学校が併置された。その間の教育や出来事を、沿革誌や他校の記念誌などによってまとめている。「島の子どもたちには先達からタフで力強く生き抜いていく資質能力が受け継がれているものと確信する」とむすぶ。

第２節「社会教育」でも、新聞をふんだんに利用し、波照間部落会の議事録が紹介され、さらに波照間婦人会の『50年の歩み』という資料がすばらしい。同書から戦後婦人会の活動が一覧表にまとめられている。講演会、講習会、座談会、研究活動、意見発表会、演劇・歌謡大会などなど。1947年から1982年まで、その回数は68回におよぶ。時事問題から生活に密着した内

容まで、時代背景とともに、女性の学習意欲がうかがわれる。とくに、座談会「男女同権、女尊男卑、官尊民卑（ママ）」が昭和22年に、講演「本土復帰後の経済はどう変わるか」が復帰２年前の同45年に行なわれ、昭和33年には映画のロケで訪れた映画監督の羽仁進と婦人会の懇談会を催している。生活改善の決めごとは、まるで近世の規模帳のようだ。

島をあげてのスポーツは、戦前、運動会、部落対抗運動会などが開かれ、昭和20年代には波照間陸上競技会、平成20年には波照間島大運動会となった。それらの成績および、現在までの体育大会などの成績が一覧表になっている。なお、スポーツ関連資料に、冨嘉チーム、喜多チームの応援歌が引用収録されている。これは盛り上がる。

第５章「人と暮らし」は、第１節「村落組織」では公民館や部落会の組織と活動がまとめられ、第２節「衣食住と暮らし」では内容もさることながら、掲載される写真は博物館などからの提供ではなく、仲底善章・村田信夫両氏の提供である。

第６章「信仰と祭祀」では、アウエハント『HATERUMA』、宮良高弘『波照間島民俗誌』が導きとなる。第１節「聖地」では、御嶽はピテヌワー（畑の御嶽）とウチェヌワー（内・村の御嶽）が対になり、前者は15・16世紀にさかのぼり、集落内にある後者はその「お通し御嶽」の性格があるという。第２節「御嶽祭祀集団」でツカサの継承が詳しく述べられるのは大きな成果といえる。さらに詳細を極める年中行事一覧表が掲示される。この章の最後は、最大の行事ムシャーマについて、飯田泰彦氏が27頁におよんで解説する。ムシャーマはそもそも盆行事で、ソーリン（精霊祭）のうちの村落行事のナカヌピン（14日）に行なわれるが、忘れてはいけない、盆にはアンガマやイタシェキェバラも行なわれる。

第７章「人生儀礼」第２節「恋愛・婚姻」の「古謡にみる男女交際から婚姻まで」は、興味深い試みに成功している。第３章「葬制・墓制」については、古谷野洋子氏が35頁におよんで、長年の詳細な調査・研究成果を披瀝された。とくに、戦死者と戦争マラリア死者の葬法への視点は、これまでにない。町史島じま編の企画では地元の執筆者を中心とするが、研究者が加わることで、厚みが増した。本書では、島関係者で研究者として育っている阿利よし乃・保久盛陽の両氏が加わっており、企画と成果の両方を兼ね備えている。

第８章「生業・産業」では、第１節「農業と製糖業」にはじまり、畜産業、養蚕業、水産業、酒造業、商業と続く。第１節では、波照間島の農業を「中型製糖工場設置」以前と以後にわけて記述する。これは工場設置によって水田がサトウキビ畑になったことから、時代区分とした。そして、地形・土壌ごとに作物の解説をする。また昭和50年代に始まる土地改良事業にも言及し、その功罪を指摘する。さらに製糖・漁業、年中行事も入れた、生業暦を掲示する。生業とはそういうものだろう。畜産業では、日本軍よって家畜類のすべてが徴発されて屠殺されたという。

第９章「交通・通信・情報」のうち、「交通」では陸上交通つまり道路を、土地改良前後にわけてみる。以前の道は「波照間島のウダチェと道路」で図示する。土地改良では「旧道をなくして新たに違うルートに道を設けている場所も数多く」、現在の道路地図を掲げる。

第10章「保健・衛生」では、戦争マラリア、戦後の波照間島での蔓延と撲滅に目がむく。資料として「波照間島の医療・保健・福祉の変遷表」（年表）がまとめられている。

第11章「伝統文化」第１章「言語」では、「自由会話」として、明治30年代後半生まれの男女の会話を収録する。第２節「歌謡」では、「古謡楽譜」として、採譜を試みている。ことわざや民話・伝説には、多くの例があげられてい

て、読んで楽しい。

第12章は他巻と同じ人物編だが、とくに「各御嶽のトゥニムトゥ、近年の神司一覧」「ムシャーマの近年の芸能師匠一覧」はユニークだ。

終章のタイトルは「波照間島の未来に向けて」、本書で改めて歴史や現状を確認し、これをもとに島の未来を志向する。そのひとつには、「編集後記」でいう「本書は中間報告とも位置づけられることでしょう」がある。そもそも研究に終わりはないので、本書のようなものがそれで終わりということはない。しかも、波照間島では、第３章第12節でまとめられる「最南端の島に来島する学術調査団」、新しい史料の発掘、あるいは仲本氏の遺稿集が刊行されたり、若手の研究者が育っているなど、次の波照間島編への準備は進んでいる。

（『八重山日報』2018年８月６日、８月７日付）

歴史や自然　島学の結晶

平良勝保

本書は、序章が「『すむづれ』の島」となっている。竹富町史島々編は、それぞれの巻に「〇〇の島」というような短いキャッチコピーでその島の文化的特質を的確に表現していることが特徴的である。「すむづれ」とは本書によれば「肝揃え」＝「こころをひとつにする」とされる。筆者は、もう一〇年以上前のことだが、三年ほど（三回）続けて波照間島に調査に通ったことがある。島には、多くの御嶽があり、御嶽を中心とした共同体的紐帯の強さと人びとの優しさを感じた。また、よく手入れされた耕地に島人の勤勉さを見た。

本書は十三章からなり、島の自然・歴史・文化・生活が網羅されており、浩瀚な書物である。すべてを紹介することはできないが、歴史を中心に紹介したい。波照間島は、王府に反旗を翻したアカハチの出身地といわれるが、アカハチに抗した長田大主や明宇底獅子嘉殿もまた波照間の出身である。このほか、大史姓、松茂姓も波照間島を出自とする。多くの有力者が登場した背景には、島の豊かさと島民の勤勉性があったのではないだろうか。本書ではアカハチ事件について、諸説の紹介と考察が行われている。同時代史料である「国王頌徳碑」や久米島のクェーナでは、宮古島も攻められており、首里王府の版図外であったことが明らかである。版図外の地域が反逆することはない。琉球の帝国化事業と内部抗争が事件の背景であろう。人頭税に関していえば、上木税という貢租は存在しない。「八重山島諸座規模帳」では、四八九種類の八重山島の産物が記されており、これは夫賃米や夫遣によって調達されたと考えられる。

このように、本書にはいくつか私見とは違う部分もあるが、特に第２章「自然」、第８章生業・産業」も興味深く読んだ。本書の執筆者ほとんどが島出身であり、島への愛、島に対する知的好奇心の発露の成果といえよう。島の出身者は勿論、島学の結晶として教育に携わる先生や研究者にも読んでほしい本である。

（『沖縄タイムス』2018年８月18日付）

スムヅレの島を網羅

照屋　理

波照間島といえば、一般に日本における有人島の中で最南端と説明される島である。このほどその島の地域誌が竹富町史の中の一冊として上梓された。

竹富町は「通史編」「島じま編」「資料編」の三本柱で町史編纂を進めており、「島じま編」はこれまで４冊（竹富島編、小浜島編、新城島編、鳩間島編）が刊行されている。それぞれ読みごたえがあるが、総ページ数904、全13章か

らなる本誌も非常に充実した内容になっている。

いわゆる波照間方言での表現を、各章で丁寧に記述しているのがまず面白い。例えば第２章の「自然」では、小さな虫や草まで方言名が記されている。それらの名称から島の人々のユニークな発想や、個々の動植物がどのように生活に関わってきたかなど、眺めるだけでうかがうことができ、単なる記録にとどまっていない。

波照間島は、沖縄の近現代史において強制移住による〈戦争マラリア〉の被害があったことでも特筆される島である。その経緯や証言については第３章「歴史と伝承」に詳述されているほか、第４章「教育」、第７章「人生儀礼」等でもそれぞれの視点から〈戦争マラリア〉についての記述がある。戦争が戦災だけではなく人災による被害も大きいことを学べる貴重な記録であり、改ざんも書き換えも許されない人類共通の財産ともいえよう。

また、島に豊富に伝承されている説話や古謡も、本書では丹念に拾われている。それらは第３章にまとめられているほか、各章の中に編み込まれている。説話が島の人々の生活に分かち難く根付いており、古謡は折々の芸能の場や年間40以上ある島の祭祀の中で現在も息づき、島の人々やツカサたちによって大切に歌い継がれているのが伝わってくる。

波照間島はスムヅレの島、波照間の人々はミンピゥガーと称されるという。スムヅレとは「心を一つにする」の意、ミンピゥガーは「気立てのいい人」の意とされる。日本最南端の有人島というだけでなく、ミンピゥガーの人々の紡いだスムヅレの島の歴史や文化に、本書を通して想い馳せてみませんか。

（『琉球新報』2018年８月19日付）

第38回竹富町史編集委員会

―議　事　録―

本議事録は、第38回竹富町史編集委員会を記録した音声資料に基づいて、竹富町史編集係がテキスト化し、それを石垣久雄氏が要約したものである。

第38回竹富町史編集委員会が下記の通り開催された。

日時　2018年７月13日（金）　ＡＭ10：00－ＰＭ４：00
場所　竹富町教育委員会（石垣市ＩＴ事業支援センター３階）

2018年５月、黒島精耕委員から体調不良のため委員辞退の申し出があったので、その補充を花城正美氏に委嘱した。編集委員会の出席者は竹富町史編集委員15人（石垣久雄、里井洋一、西里喜行、石垣金星、上江洲儀正、大浜修、花城正美、玉城功一、通事孝作、西表隆夫、鳩間真英、本田昭正、三木健、吉川安一、狩俣恵一）、仲田森和氏（竹富町教育長）、新盛勝一氏（社会文化課課長）、町史編集係（３人）の計20人。

欠席者は大城肇氏、花井正光氏、新本光孝氏（以上、竹富町史編集委員）の３人。

編集委員会に先立って、竹富町教育長・仲田森和氏が次のように挨拶を述べた。

「竹富町制70周年の節目と同時に、『竹富町史　第七巻　波照間島』（以下、『波照間島編』と略記、既刊書もこれにならう）の発刊を喜びたい。竹富町の島々と連携をとりながら、子どもたちが島の歴史・文化を学ぼうとするとき、竹富町史編集事業の「島じま編」シリーズの意味するところは大きいものです。これは50年後、100年後の礎になるものと確信しています。『波照間島編』も町内各学校に配布し、学校教育のなかで大いに活用していきたい」。

続いて、編集委員長・石垣久雄氏が、「本日は『波照間島編』の発刊を皆さんとともに喜び、取り組みについてはしっかり反省をしていただきたい。また、町制40周年に企画された竹富町史編集事業の意義を再確認しながら、既刊の『竹富島編』『小浜島編』『新城島編』『鳩間島編』を具体的に活用する方法を考えていきたい」と挨拶を述べた。

事務局より経過報告があり、第38回竹富町史編集委員会の議題の審議が行われた。議題は次

の通り。

⑴『波照間島編』の発刊について
⑵　①『西表島編』の進捗状況について
　　②『黒島編』の進捗状況について
⑶その他　①『郷友会編』について
　　②『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』の進捗状況について
　　③発刊計画の確認
　　④『鳩間方言辞典』について

議題⑴『波照間島編』の発刊について　（玉城功一）

報告が部会長・玉城功一氏により行われた。2003年（平成15）に専門部会が発足し、これまでに16回の話し合いと、20数回に及ぶ執筆者・相談役とのミーティングを重ねてきた経緯、特色ある本書の魅力（「波照間島の自然・歴史・文化の魅力が満載」「生業の盛衰と深刻な高齢化・過疎化問題」）、反省と提言が述べられた。

反省として主に、ほとんどの原稿の締め切りが守れなかったこと、原稿執筆の段階で話し合いが持てなかったこと、予定の頁数を超過し原稿の縮小・削除を余儀なくされたことなどが報告された。特に神行事に関する記述の割愛は残念であった。話し合いのなかで、スケジュールの把握がなされず、計画・取り組みの煩雑さが指摘された。

議題⑵－①『西表島編』の進捗状況について　（石垣金星）

報告が部会長・石垣金星氏により行われた。『西表島編』の分冊が了承され（2013年、第30回）、第37回編集委員会で「近代・開拓編」（仮称）の章立てを報告したが、それ以後専門部会も持てず進展していない。

話し合いのなかで、分量（頁数）や「歴史・民俗編」（仮称）の章立てなどが提示されていないことから、見通しの甘さが指摘された。再度、章立て（内容・構成）・計画を見直し、全体像の提示が求められた。部会は、当初計画していたように、１冊にまとめることも視野に入れて検討し、次回編集委員会（第39回、12／７開催予定）に章立て・計画を報告することが要望された。

議題⑵－②『黒島編』の進捗状況について　（鳩間真英）

報告が部会長・鳩間真英氏により行われた。前専門部会長・玻座真武氏の遺稿「黒島ノート」が『竹富町史だより』〈第40・41合併号〉にまとめることができ、今後『黒島編』を編むにあたり大いに活用したい旨が述べられた。玻座真氏の担当箇所は後任の委員・西表隆夫氏が引き継ぐことになった。一昨年から毎月10日に地元執筆者が集まって会議を開いているが、近々専門部会を開催し、本格的に取り組む計画である。

議題(3)－①　『郷友会編』について　（狩俣恵一）

部会長・狩俣恵一氏から、『郷友会編』を編むについて、編集委員会のなかで小委員会を発足させ、組織的に編集作業を進めることの必要性が述べられた。そのためには具体的に組織を整え、連絡名簿を作成し、基礎資料を収集することから始めていくという計画が示された。事務局からは「郷友会連絡名簿」（未定稿）、「竹富町郷友会資料目録」（未定稿）の提供があった。

小委員会は準備委員会としての役割があり、狩俣恵一（竹富島）、花城正美（小浜島）、西表隆夫（黒島）、大浜修（新城島、西表島東部）、吉川安一（鳩間島）、玉城功一（波照間島）、石垣金星（西表島西部）が、ひとまず担当することになった。

今後は、内容的な課題、島々の事情を明らめつつ、島々・郷友とともに盛り上げていくことが強調された。次回編集委員会までに小委員会を開催予定。

議題(3)－②　『新聞集成』の進捗状況について　（事務局）

『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』の進捗状況について、事務局から報告が行われた。既に入力済みのデータを提示し、参考として『八重山毎日新聞』の1964年（昭和39）８月１日～1965年（同40）７月31日まで、約１年間の記事タイトルとキーワードを記した一覧表をつくり、今後の編集作業の目安とした。

今後は編集委員のなかから、八重山地域にいる委員を中心とした、小委員会を発足させ、収録記事の取捨選択を行うことになった。その際、プライバシー、フェイクニュース、人権、個人情報などに配慮しながら収録記事の基準を明確にするため、記事をA·B·Cの３段階に分類して検討する作業が具体的に述べられた。

議題(3)－③　発刊計画の確認　（事務局）

ここまでの審議のなかで、既に『西表島編』の編集が遅れていることが指摘されており、発刊計画の見直しが求められた。特に、平成31年度の『近代・開拓編』発刊は、スケジュール的に実現可能なのか疑問視する声があがった。平成30年度は『竹富町史　第十一巻　資料編　新聞集成Ⅶ』を発刊することが確認され、平成31年度以降の発刊計画については、刊行の手順も視野に入れながら、次回編集委員会で決定することになった。

場合によっては、『西表島編』『黒島編』について、刊行順番の入れ替えの可能性も示唆された。また、内容を充実させるため、『新聞集成』などの基礎資料を整え、それを活用するかたちで編集を進める計画案の再考も要望された。

議題(3)－④　『鳩間島方言辞典』について　（吉川安一）

委員・吉川安一氏より「『鳩間島方言辞典』の竹富町史の出版物としての取り扱いの願い」があった。既に原稿化されている資料として、加治工真市氏（沖縄県立芸術大学名誉教授）の『鳩間島方言

辞典』が紹介され、その記録・研究成果の重要性について説明が行われた。そして、本資料を竹富町の文化遺産として、竹富町から刊行することの意義が主張された。

これに対して、その価値は誰もが認めるものであるが、竹富町史編集事業としての刊行には、他島とのバランス、3400頁を想定する大著であること、個人の研究功績と公共性など、いくつかクリアすべき課題があがった。当局からは、公民館や郷友会と連携しながら、生涯学習事業のなかで支援できる方法を摸索したい旨が述べられた。

また、議題（1）（2）（3）を通じて、編集委員会・専門部会・事務局の役割分担について再確認する必要が求められた。

これに対して、編集委員会は刊行物の編著者であり大枠を決める役割があるが、その具体的な内容は専門部会に委任することになる。そして、専門部会は内容のチェック機能としての役割を充分に遂行しなければならないことが確認された。

嘉手志川

—2018年度沖縄県地域史協議会総会及び研修会から—

５月25日、糸満市農村環境改善センターで、2018年度沖縄県地域史協議会総会及び研修会が開催されました。今回の研修は午前中が「南山グスク・大里集落巡見」、午後からは上里隆史氏の講演「古琉球期の山南とグスク」、新垣瑛士（南城市教育委員会）「『南城市のグスク』および『南城市の御嶽』について」、城間義勝（北中城教育委員会）「『島袋のろ殿内資料』に関する刊行物について」、飯田泰彦（竹富町教育委員会）「竹富町史『島じま編』シリーズの刊行について—『竹富町史　第七巻　波照間島』を中心に—」の報告３本があり、沖縄県内より地域史編集に携わる127名が参加しました。

上里氏は講演の主題とは別に、今後地域史編集に求められることとして、①考古学調査の新たな成果を加えること、②広く地域を越えて同時代の状況を視野に入れること、③地域内外の認識の齟齬を踏まえること、の３点を強調されました。③については、竹富町史編集事業にも大きく関わることで、島の内側からの視点で資史料を検証することの必要性を再確認しました。

午前中の巡見では、①「南山グスク・字大里集落コース」、②「南山グスク・海人工房資料館コース」、③「バスでたずねる南山のグスクと伝説コース」が設定されていました。ここでは③コースの井泉「嘉手志川」を紹介します。満々と水をたたえた嘉手志川は強く印象に残りました。

糸満市字大里にある嘉手志川は、南山城の麓に位置し、古くから水量が豊富な井泉として知られています。首里王府編纂の神歌集『おもろさうし』には、次のように歌われています。

一	あかのこか	（阿嘉の子が）
	ねはのこか	（饒波の子が）
	ももちやらのふれおもひてた	（多くの按司に敬愛されている按司様）
又	大さとは　さとからなる	（大里は村からぞ）
又	かてしかわ　みつからる	（嘉手志川の水からぞ）

（『おもろさうし』巻20－1373）

このオモロから具体的な内容は分かりませんが、実際に豊かな水に恵まれた嘉手志川を目にすると、平和な暮らしを送る往時の大里の人々の様子が想像できます。柳田国男は『海南小記』で、「嘉手志は沖縄語で、人の集まつて来ることを意味すると謂ふが、果してさうであろうか。土地の一説では、古くは又カタリガーとも称えた。即ち伝説の存ずる泉と謂ふことである」と伝えています。また、「カデシ」とは「カリ

嘉手志川（糸満市大里）

ユシ」の転訛した語だという説もあります。

首里王府編纂の『琉球国由来記』(1713年)には、「屋古村」(大里古島遺跡に比定)の井泉として、次のような伝説を記録しています。

> 昔日大旱、浜辺ニ水無之、諸人、渇ケル故、海辺ニ水之有所ヲ求ガ為ニ、船ヲ仕立、出船之砌、此川之近辺、山ニテアリケリ。犬一疋、山中ヨリ水ニ濡出来ヲ人見逢、不審ニ存、彼ノ犬ヲ列、右之山中へ行ケルニ、水ノ所有ヲ見セ、犬即、水中ニ入、化シテ石ト成。水ノ神ト相悦、爰ニ水有トテ、大声ニ人ヲ呼、右出船之人々モ呼帰。夫ヨリ此水、諸人用也。因テ、カデシ川ト名付ケルトゾ。犬化ケル石ヲバ、石積廻シ、于今、水中之石御イベト申伝也。其後、佐敷小按司、有金囲屏。島尻大里按司、其囲屏ヲ欲得、竟ニ金囲屏ヲ以テ、換于嘉手志川。小按司、水ヲ禁ジテ、帰己者ニハ与水、不帰己者ニハ不許用其水。大里百姓、無水シテ、不能種田。多帰小按司。

(『定本　琉球国由来記』12－272)

上の記述から、主に二つのことが分かります。

一つは嘉手志川が犬によって発見されたことです。竹富町の井泉のうち、竹富島の仲筋井戸(ナージカー)や波照間島のシィムス井戸(ケ)なども、動物が発見した井戸として知られています。仲筋井戸は犬で、シィムス井戸は牛が発見した井戸です。

仲筋井戸(竹富島)

もう一つは、島尻大里按司がこの井泉を佐敷小按司(後の尚巴志)の持つ金屏風と交換したことにより、水を使えなくなった大里の百姓は小按司に従ったということです。地域の伝承によると、ここに登場する「島尻大里按司」は最後の南山王・他魯毎(タルマイ)であり、嘉手志川という南山繁栄の源泉を失ったことが、14～15世紀に栄華を極めた南山を滅ぼした要因であると伝えられています。

シィムス井戸(波照間島)

この伝承について、伊波普猷は「尚巴志が南山を攻めた時、先づ計を以てこの泉を柜し、奇勝を博した、といふ伝承があるが、これは恐らく南山城陥落の頃に、この恵泉のなかった旁証で、ずっと後世になって生長したもの」とみなしています(『伊波普猷全集』〈第6巻〉)。大城盛光氏も「尚巴志が南山王を滅ぼしていく動機となった水利権譲渡にまつわる嘉手志川の伝承は、時代の権力者が水利権を巧みに利用していかに人間の欲望を掬い上げ、或いは組織づけて歴史を作っていくかを物語」ったものとみ

ています。

1719年、尚敬王の冊封副使として来琉した徐葆光は、王府高官の紫金大夫蔡温の案内で嘉手志川を訪れ、「恵泉詩」と題して五言律詩を残しています。

勺水無興廢　（勺水は興廢なし）
冷冷傍故城　（冷冷として故城に傍らす）
猶堪資谷汲　（猶お谷に資りて汲むに堪うるごとく）
只守在山清　（只だ山に在りて清らなるを守る）
石罅通泉脈　（石罅　泉脈に通じ）
松間作溜聲　（松間　溜聲を作す）
夕陂還歇馬　（夕陂　還りに馬を歇め）
一掬漱餘酲　（一掬して餘酲に漱ぐ）

（「恵泉詩」『琉球国使略』）

徐葆光が訪ねた南山の風景は、果たして実景だったのか、あるいは幻視した光景であったのか判然としませんが、鄔揚華氏により詩情豊かに訳されことで、「恵泉」が私たちの目の前に時空を越えて蘇ってきます。

汲み取る水は世の盛衰にかかわりなく、
さらさらと故城（高嶺城）の側を流れている。
今もなお水源が豊富なので谷川に導くことができる。
ただ山の清らかさを守ることだけだ。
石の裂け目は泉の水脈につながっている。
松の木の間に渓流の流れる音が響く。
夕方、泉の土手に戻って馬を休ませる（水浴びさせる）。
ひと掬いして宿酔をすすぐ。

（『「徐葆光　奉使琉球詩　舶中集」詳解』2010年）

嘉手志川は、現在も大里集落の田畑を潤すのみならず、納涼スポットとしても知られ、地元の人や観光客など訪れる人が絶えません。このように嘉手志川は大里集落の歴史の変遷とともに存在してきました。しかし、地域の水利を確保し、『おもろさうし』で「ももちやらのふれおもひてた」（多くの按司に敬愛されている按司様）と称えられた領主は、いったい誰を指したのか、いまだ謎に包まれたままです。

嘉手志川は信仰の対象でもあり、神名を「シラカネノ御イベ」（『琉球国由来記』）と称します。すぐ側にあるカミガーと、南へ約50mのところにある小さな井泉・ウビー川の三つの井戸は聖なる井戸として尊ばれています。ちなみに、ウビー川は「チョンチョンガー」とも呼ばれています。

参考資料

・大城盛光「大里は水からぞ」（『おもろを歩く―おもろ研究会1500回記念誌―』、2013年）

竹富町史の刊行物一覧

No.	書　　籍　　名	発行年度	税抜価格
1	竹富町別巻②　竹富町史文献目録	1990年度	
2	竹富町史　別巻③　写真集「ぱいぬしまじま」	1992年度	¥2,500
3	竹富町史　第十巻　資料編「近代１－喜宝院蒐集館文書」	2004年度	¥2,500
4	竹富町史　第十巻　資料編「近代２－必要書・必要書類集」	2001年度	¥2,500
5	竹富町史　第十巻　資料編「近代３－新城村頭の日誌」	2005年度	¥2,500
6	竹富町史　第十巻資料編「近代４－官報にみる八重山」	2006年度	¥2,500
7	竹富町史　第十巻資料編「近代５－波照間島近代資料集」	2009年度	¥2,500
8	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅰ」	1993年度	¥2,000
9	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅱ」	1994年度	¥2,000
10	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅲ」	1996年度	¥2,000
11	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅳ」	2000年度	¥2,000
12	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅴ」	2002年度	¥2,000
13	竹富町史　第十一巻　資料編「新聞集成Ⅵ」	2003年度	¥2,000
14	竹富町史　第十二巻　資料編「戦争体験記録」	1995年度	¥3,000
15	竹富町制施行50周年記念誌　「ぱいぬしまじま50」	1998年度	¥2,500
16	竹富町史　資料集①　「鉄田義司日記」	1999年度	
17	竹富町史　第二巻　竹富島	2011年度	¥3,000
18	竹富町史　第三巻　小浜島	2011年度	¥3,000
19	竹富町史　第五巻　新城島	2013年度	¥3,000
20	竹富町史　第六巻　鳩間島	2014年度	¥3,000
21	竹富町史　第七巻　波照間島	2017年度	¥3,000

編集後記

八重山は1897年（明治30）に一郡一間切となり、1908年（同41）に八重山村が誕生しました。その後、1914年（大正３）に八重山村は分村して、石垣村、大浜村、竹富村、与那国村の四カ村となりましたが、第２次世界大戦後の1948年（昭和23）７月２日、南部琉球軍政府（米軍）の許可により竹富村は町に昇格しました。そして2018年（平成30）、竹富町は町制施行70周年を迎えました。

そんなわけで今年度は、恒例の球技大会や運動会、デンサ節大会などのイベントにも「町制施行70周年」を冠に付して開催しています。なかでも「竹富町制施行70周年記念公演　竹富町島々の民俗芸能―世乞い―」（９月24日、東京・国立劇場）は冠事業における一つのクライマックスだといえます。

「白夏（ッサナチィ）」（夏の終わり）以降は、冠行事だけでなく、島々は伝統的な年中行事が目白押しです。八月十五夜、結願祭、節祭、種子取祭…など、季節の折目や農暦によって祭祀が執り行われます。祈願だけで終える祭祀や、特設舞台で間断なく踊り・狂言を奉納したりするものまで、島によって表現方法は異なります。しかし、どの島の祭祀にも「世乞い－世（豊穣）を乞い願う－」という主題を読みとることができます。だから、そこで演じられる芸能には、「世乞い」の思いが通奏低音のように響いてくるのです。

さて『竹富町史だより』〈第42号〉は、「島々の踊り・狂言№３」と、『竹富町史　第七巻　波照間島』の書評を中心に構成しました。とりわけ前者は「世乞い」公演から４題の民俗芸能をピックアップし紹介したものです。多くの方が竹富町の民俗芸能や『竹富町史　第七巻　波照間島』に関心を持っていただく契機になれば幸いです。

竹富町制施行70周年という節目に歴史を振り返り、町民をはじめ多くの人が竹富町の魅力を再認識・再発見することは、たいへん意義深いことだと思います。

2018年９月24日発行

竹富町史だより

第42号

編集発行　竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町６－18－３F

TEL　0980－87－6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp